

第 27 回島根県国保地域医療学会参加・シンポジウム発表報告

原めぐみ

要 旨：2019 年 10 月 26 日に第 27 回島根県国保地域医療学会が「災害と地域包括医療・ケア」のテーマで開催された。「DMAT から見た地域包括医療とは」という題で、DMAT の看護師としてシンポジウムで発言した。災害に立ち向かうためには住民や多職種と連携し地域を守って行かなければならない。講演では、災害時に DMAT が担当する急性期医療と並行して、発災直後から慢性期疾患の悪化予防、エコノミークラス症候群や感染症への対応、精神的ケアをかかりつけ医や国保の医師と連携して行う重要性が示された。引き続きシンポジウムでは、私を含めた 4 名のシンポジストが、被災時の医療やサービスの範囲の事前計画、災害マニュアルの定期的整備の必要性、行政と連携し地域住民に自主的に防災に取り組むよう指導する有用性、マニュアルに沿った訓練の実施、検証と修正、「地域包括ケアを担う部署としての行動計画づくり」、「他部署・関係組織との連携」、「地域住民との協働」の重要性を提示した。当院からは、ボランティアや高校生と行った院内防災訓練・病院支援合併訓練、出前講座を通じた市民の啓蒙活動の話をした。国保地域医療学会に参加し感じたのは、当院でも参考になる話題が多く、多くの人に聞いてもらいたかった。自治体病院の役割として、地域住民や地域の多職種との連携の必要性を感じた。人それぞれ思い描く連携を具体的にするには、話し合い、伝え合い、相手を理解し（受け入れ）、形作ることに尽きると思われた。

キーワード：災害医療・看護;地域包括ケア；災害派遣医療チーム(disaster medical assistance team)、DMAT)

(雲南市立病院医学雑誌 2021 ; 17(1) : 印刷中)

令和元年(2019年)10月26日に、ホテル白鳥で「第27回島根県国保地域医療学会」が開催された¹⁾。この年の学会テーマは「災害と地域包括医療・ケア」であった。国保診療施設や行政の関係事務局、介護福祉関係からも出席があり、当病院から「DMAT から見た地域包括医療とは」という課題で、DMAT の看護師としてシンポジウムで発言した。

会で発表するにあたって私なりに改めて気づいたことがあり、述べていきたいと思うが、まずは DMAT について説明する。

雲南市立病院は 1996 年に災害拠点病院に指定されている。災害拠点病院とは、①災害発生時に 24 時間緊急対応する、②災害発生時に被災地からの傷病者の受け入れや搬送ができる、③DMAT を保有し派遣体制がある、④災害等の当該地域となった場合はほかの DMAT や医療チームの支援を受けられる、などの条件

を満たしている病院である。

DMAT が発足したきっかけは、1995 年の阪神・淡路大震災であった。この時多くの傷病者が発生し、被災地で十分な医療も受けられずに死亡した症例、「防ぎえる災害死」が大きな問題となった。

そして 2011 年に東日本大震災があり、それをきっかけに、2013 年に DMAT を保有していない災害拠点病院に DMAT を配置することが義務付けられた。雲南市立病院も 2013 年に DMAT (災害派遣医療チーム)であり、災害の急性期に活動性を発揮できるように専門的な訓練を受けた医療チーム)を結成している(図 1)。

私が DMAT になったきっかけも、まさに東日本大震災であった。東日本大震災があっても何もできない自分に無力さを感じていた。被災した人を助けたい＝地域で困っている人を助けたいと思う気持ちが、DMAT の隊員になるきっかけとなり、今は訪問看護で



図 1：雲南市立病院 DMAT の実際の活動



図 2：災害支援活動・災害医療に関する DMAT 技能維持訓練

働いている原動力になっている。

「災害と地域包括ケア」と言うと、繋がってないように感じる方もいるかも知れない。しかし、災害に立ち向かうためには住民の方々や、多職種と連携し地域を守って行かなければならない。

講演で、気仙沼市立本吉病院（宮城県）院長の齊藤 掇先生から東日本大震災時に支援活動に行かれた内容の話がなされた²⁾。活動を通して、①「災害は常に想定外の事が起こることを想定しておくことが必要」、②「情報の寸断は常に起こりえるので、基礎自治体単位で災害対応ができるように、各機関で担当者を複数育成することが肝要」、③「災害で直接障害を受けた患者への急性期医療と並行して、災害発生直後から慢性期疾患の悪化予防、エコノミークラス症候群や感染症への対応、精神的ケアが必要」と話した。そして、③の時には急性期を担当する DMAT と連携して、かかりつけ医や国保の医師たちがその後の悪化予防や感染症対策、精神的ケアを行っていく事が重要と話した。

シンポジウムでは、安来市立病院の臨床工学技士から、①「断水時の対応と経験から得た課題について」³⁾、大田市総務部危機管理課から、②「島根県西部地震から 1 年半が経過して」⁴⁾、松江市立病院の管理栄養士から、③「災害時における患者給食提供体制につい

て」⁵⁾、浜田市国民健康保険弥栄診療所所長から、④「災害と地域包括医療・ケア調査から考える防災の取り組みの課題」⁶⁾について発表があり、そして、雲南市立病院の DMAT の看護師として⑤「DMAT の活動と地域住民への発信」について発表した⁷⁾。

①は、2016 年に気温低下による水道管の凍結破損にて断水を経験され、当時透析室でマニュアルマニュアルがなく早期に対応することが出来なくて困ったこと、その経験から得た課題、透析室災害対策の取り組み、そこから得た成果と今後の新たな課題について話された。課題として被災時に提供できる医療やサービスを明確にしておく事前計画が必要であること、そのためライフラインの使用量を把握し、提供できる医療行為の範囲を検討すること、委員会を定期的に開催し、災害マニュアルの整備をすることが必要との事であった³⁾。当院でも透析を行っているのでこのような対応は参考になると思われた。

②は、2018 年にあった震度 5 強の島根県西部地震での災害対策本部の設置、避難所の設置・運営、情報収集と市民への情報提供について、医療機関の被災状況について、要配慮者への対応について、ボランティアセンターの設置について話された。「大田市は災害がないという根拠もない神話が崩れた時」、「災害がない所というのは単なる思い込みだった」と感じ、今後も災害に対する取り組みが必要だということ、そのために地域の住民に自主的に防災について取り組んでもらうように行政も一緒になって取り組んでいるとの事であった⁴⁾。

③は、災害拠点病院として 24 時間救急対応、DMAT の保有の他、自家発電装置や受水槽を整備、食料及び飲料を備蓄し、管理栄養士として備蓄状況の様子、災害時での病院給食提供体制についての説明があった。そして、今後の課題として「マニュアルに沿った訓練を実施し、検証と修正が必要」、「ローリングストック法（常温保存可能で消費期限の比較的長期な食品を災害時に使用するために、常備量を増やし、順次消費・補充していく方法）をさらに活用し、献立の拡充を図る」、「栄養量の少ない粥食、嚥下調整食の栄養量の見直しが必要」と他 2 つの課題もあげ、地域の中で協力要請ができる体制づくりもすすめていかなければならないと報告していた⁵⁾。

④は、県内の関連施設・団体に「災害と地域包括医療・ケア調査」として防災の取り組みの実態についてアンケート調査を行った結果を発表、浜田市の取り組みも含め今後の課題について検討したことを報告した。検討された提案は、「地域包括ケアを担う部署としての行動計画づくり」、「他部署・関係組織との連携」、「地域住民との協働」との 3 点であった⁶⁾。

⑤では、雲南市立病院の DMAT の活動報告として、災害支援活動・災害医療に関する訓練の実施として技能維持訓練(図 2)をしていることや、院内防災訓練と合わせて病院支援の訓練をボランティアや高校生と一緒に行った様子(図 3)や、出前講座を通して市民の方々に啓蒙活動(図 4)を行っていることを報告した⁷⁾。



図3：病院ボランティアや高校生と一緒にいった院内防災訓練・DMAT病院支援受け入れ訓練



図4：出前講座を通じた市民への啓蒙活動

まとめとしては、他の報告者が話したように、日ごろの備えや訓練が必要だということ、多職種との連携が必要なこと、地域住民との関係づくりが必要だということが話された。

国保地域医療学会に参加し感じたのは、断水時の対応や患者給食提供体制について当病院でも参考になることがあり、看護師の私にも勉強になった。より多くの人に一緒に聞いてもらえるとよかったと思われた。また、前述した様に自治体病院の役割として、地域住民や地域の多職種と連携が必要ということを改めて感じた。しかし「連携」と言っても、連携とは何か、誰とどのように連携するか・・・など、連携の捉え方は人それぞれ異なる。思い描く連携を具体的にするには、「話し合うこと」、そして「伝え合う」「相手を理解する（受け入れる）」「形作る」ことに尽きると思われる。自治体病院で看護師として働く私にできることは何かを今後も模索しながら邁進していきたいと思えます。

参 考 文 献

- 1) 島根県国民健康保険診療施設協議会、島根県国民健康保険団体連合会編. 第27回島根県国保地域医療学会プログラム. 島根：島根県国民健康保険診療施設協議会、島根県国民健康保険団体連合会；2019.
- 2) 齊藤稔哲. 災害と地域包括医療・ケア(本吉の経験をふまえて). 島根県国保地域医療学会学会誌 2020;27:41-58.
- 3) 下島忠. 断水時の対応と経験から得た課題について. 島根県国保地域医療学会学会誌 2020;27:61-67.
- 4) 藤原陽一. 島根県西部地震から1年半が経過して. 島根県国保地域医療学会学会誌 2020;27:68-72.
- 5) 森山純子. 災害時における患者給食提供体制について. 島根県国保地域医療学会学会誌 2020;27:73-77.
- 6) 阿部顕治. 「災害と地域包括医療・ケア調査」から考える防災の取り組みの課題. 島根県国保地域医療学会学会誌 2020;27:83-89.
- 7) 原めぐみ. DMATの活動と地域住民への発信. 島根県国保地域医療学会学会誌 2020;27:78-82.

An experience of participation as a symposist in the 27th Shimane Annual Congress of the Japan National Health Insurance Clinics and Hospitals Association (JNCA)

Megumi Hara

Abstract : The 27th Shimane Annual Congress of JNCA was held on Oct. 26, 2019, in Matsue, Shimane under the theme of “Disaster and integrated community care system.” A speech was given concerning our activities, entitled “Integrated community care system in the viewpoint of the Disaster Medical Assistance Team (DMAT)”, as a nursing staff member of Unnan City Hospital Unit in Shimane DMAT. We should protect our communities under good cooperation with its inhabitants, professionals and workers in many other fields. The keynote speech emphasized the importance of not only acute care medicine but also the prevention of the worsening of chronic diseases, the occurrence of thromboembolisation and the spread of infectious diseases under cooperation with out-of-hospital general doctors.

Key words: disaster medicine and nursing care; integrated community care system; disaster medical assistance team (DMAT)

Home nursing station Unnan

Correspondence: Megumi Hara, Home nursing station Unnan, Department of clinical dietary, Unnan City Hospital [96-1 Daito-cho Iida, Unnan, Shimane 699-1221, JAPAN]

E-mail: hospital-soumu@city.unnan.shimane.jp

Telephone: 0854-47-7500/ Fax: 0854-47-7501